

Fill The Boots! Fill The Boots!



嘉手納スペシャルオリンピックス開催に向け、消防隊員ら寄付金集めに奮闘 第18航空団広報局

今年も嘉手納基地の消防隊員らが熱い思いで実施した資金造成活動「フィル・ザ・ブーツ」（ブーツを一杯にして！）が行われました。これは、嘉手納スペシャルオリンピックス大会に向けての募金活動で、消防隊員らが2日間にわたり「ブーツ」を掲げながら基地内の住民に対し「お願いします」と寄付をお願いしたところ、今年はなんと22,000ドル余の寄付金が集まりました。今回、中心的役割を担った第18施設中隊の消防隊員ロバート・ジャービス2等軍曹及びジャーミー・バイス2等軍曹に対し、第18航空団司令官ウィルズバック准将より感謝の言葉が述べられ、チャレンジコインが授与されました。



嘉手納スペシャルオリンピックスは、今年も多くの日米ボランティア、寄付金、地元のサポート及びアメリカ4軍のサポートを得て、11月6日に開催されます。

2010 KADENA SPECIAL OLYMPICS -----SATURDAY 6TH NOVEMBER-----!!!!!!!!!!!!!!

Part I

- Page 1... フィル・ザ・ブーツ！
- Page 2... KSO実行委員会激励会
- Page 3... F-22部隊要員の寄付活動
- Page 4... 日米児童交流会

Part II

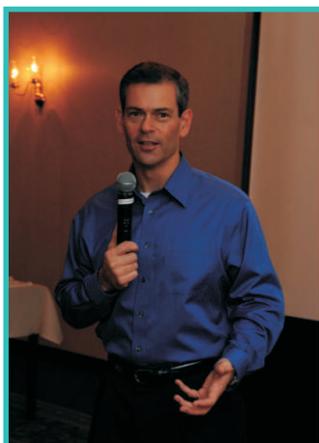
- Page 5... カップケーキで交流会
- Page 6... 司令官、地元の皆様へ米国文化を紹介
- Page 7... 嘉手納基地ベースパス更新義務化



(写真全て、米空軍：ジェイソン・エドワーズ一等軍曹撮影)



11月6日に開催される嘉手納スペシャルオリンピックス大会成功に向け、実行委員を励ます会が嘉手納基地将校クラブにて開催されました。同実行委員会の運営部長であるフーバー少佐の司会のもと、昨年のスペシャルオリンピックス大会の様子を映像にて振り返りました。



第18航空団司令官のウィルズバック准将は挨拶のなかで、「昨年のスペシャルオリンピックス大会でのエピソードを皆様にご紹介しましょう。『これだけの数のアメリカ人ボランティアをどうやって集めることができるのですか？』と、日本側のゲストから聞かれ、『彼らにボランティアの参加をお願いしただけなんです。』と答えました。まさにこれが、嘉手納スペシャルオリンピックスの精神なのです。ボランティア精神によって支えられ嘉手納基地で開催できる事を大変誇りに思っています。ここにいる皆様も、自分の周りの方々に、是非ボランティアとしての参加を呼びかけてみて下さい。今年も更に大きくなった嘉手納スペシャルオリンピックスを成功させましょう！」と述べました。

地元地域には、スペシャルオリンピックス日本・沖縄（SO日本・沖縄）という団体があり、アスリートとボランティアコーチが一緒になり、一つの種目をおよそ3ヶ月にわたり週一回のペースで練習しているとのこと。今回の懇親会に、SO日本 沖縄の活動メンバーも招待されました。その会長である安田未知子氏にお話を伺ったところ、「米軍側から多くのサポートを経て、毎年嘉手納スペシャルオリンピックスが実施されている事に対し大変感謝しています。アメリカ人のボランティア精神は大変素晴らしく、日本人はそこから多くを学ぶべきだと感じます。まるで我が子のこの様に一生懸命応援するアメリカ人ボランティアの様子を見てみると、本当に感動します。又、参加者のアスリートたちは夢を持って参加しており、本当に素晴らしい大会で、長く続く事を願っています。」と答えてくれました。

会場では、特別ゲストとして、ニックス・ハマヤー空手太鼓が力のある太鼓パフォーマンスを披露し、和やかな雰囲気の中、参加者は今年もアスリートの笑顔を目標に大会準備に励む実行委員メンバーの熱い会話に溢れていました。





F-22部隊要員が地元へ寄付活動

第18航空団広報局

嘉手納基地に一時派遣されていた（5月～9月）ニューメキシコ州ホロマン空軍基地第49戦闘航空団第7戦闘中隊からのボランティア10人が、7月30日に沖縄市立母子生活支援施設レインボーハイツを訪れ、生活必需品を寄付しました。同部隊から嘉手納基地に派遣されていた約280人から約2000ドルが寄付金として集められ、同部隊の代表者が基地内の商店街で、台所用品、洗面用具、洗濯用品、食料品、衣料品、文房具、玩具等を購入し寄付しました。

同施設は1974年に、沖縄県で初の母子寮としてスタートし、今年の4月に新しい場所に移転しました。新施設のオープン後、同部隊のこの寄付活動は、嘉手納基地関連部隊の初めてのボランティア活動となりました。

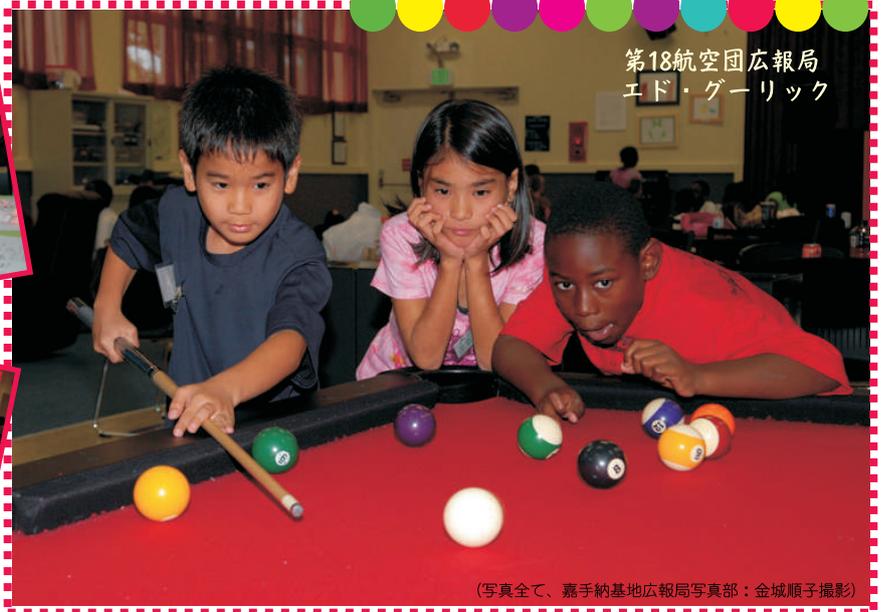
（写真全て、米空軍：ダネル・ケネディ二等軍曹撮影）



From 
49FS

日米児童が交流会に参加

第18航空団広報局
エド・ゲーリック



(写真全て、嘉手納基地広報局写真部：金城順子撮影)

2010年8月6日、嘉手納基地：様々な色の紙粘土を使ってシーサーを作るのがこんなにも難しいとは誰が想像したことでしょうか？カデナ・ユース・センターで行われた文化交流行事に参加した多くの日米児童はそのような感想を持ちました。

「難しいけれど、楽しいよ」と、製作中のシーサーに付け加えるための粘土をこねながら11歳のイーサン・スチュワート君は話しました。ペアを組んだ日本人パートナーの玉木綾紗香さんも同感なようで、彼女にとっても今回が初めてのシーサー作り。イーサン君と綾紗香さんは、他の9-11歳のおよそ40人の日米児童たちと一緒に、シーサー作りに挑戦した他、ゲームで遊んだりアメリカンスタイルの食事をするなどして、その日の大半を互いの文化を学んで過ごしました。

シーサー作りを終えると、参加者らは嘉手納基地のB Xにあるフードコートに移動し、日本人の児童はアメリカンスタイルの食事を英語を使って注文する練習をしました。各生徒は10ドル札を与えられ、好きなものを注文しました。11歳の照屋隆之介君は普段食べているものとそう変わらないものを注文したようです。「やきそばとチャーハンを注文したけれど、チャーハンは家で食べるのよりおいしかった」と、話しました。

この児童交流会は、嘉手納基地に住むアメリカ人と地元の人々の架け橋となる多くの基地主催の交流事業の一つです。「カデナ・ユース・センターと地元沖縄の隣人との国際交流プログラムは、私たち児童らにとって、日本の豊かな文化を理解する機会となっています」と、北谷ライオンズクラブと今回の交流会を企画したユース・センター所長のテレサ・ウィッチエンさんは話してくれました。ウィッチエンさんによると、ユース・センターでは以前にも「ロッキン（お泊り会）」を通じてプール、ボウリング、ゲーム、食事などを一晩中楽しむ交流会を開催したことがあります。「今年は、工芸、ゲーム、フード・コートでの食事を通して交流を持つことにしました。このプログラムが今後もずっと続くことを願っています」と、ウィッチエンさんは話しました。

FRIENDSHIP EXCHANGE
@KADENA YOUTH CENTER

